

2010年度卒業研究

制服の虚構と実態

藤女子大学文学部

文化総合学科 0615093 番

氏名 渡部 扇乃梨

担当教員 野手 修

制服の虚構と実態

渡部 扇乃梨

－はじめに－

警察官、医師、看護師、パイロット、CA、鉄道会社、銀行、工事現場、スポーツ選手など現代に生きる人々はごく当たり前仕事着として制服を着用しているが、制服を着用することは自分の社会的身分を世間に露呈していることと同義である。制服の本来の意義も、①組織の一員であるという自覚を高める②組織内での所属・位などを区別する③その組織での仲間意識を高めることにあるが、今の学生は自分の好きなように着崩してしまっている。彼らが着崩すのには何か意味があるのだろうか、なぜ、決められた形から逸脱したスタイルをしようとするのか。

チャン・ティヴィエトハー（2008）によれば、現代では制服が「拘束着」ではなくファッションの一部として意識され、女子高生は積極的に制服をおしゃれとして楽しむようになったのだという。1980年代後半からは、制服改定ブームにより、制服そのものが多様化し、デザインが豊富になるとともに、着用のバリエーションも多くなった。制服は単なる強制的なものではなく、制服はファッション化し、制服の着こなしや着崩しなどの現象もみられ、いわゆる、制服は若者ファッションの一分野としての地位を確立し、女子高生の制服は「女子高生ブランド」として定着した。2000年代から登場した「なんちゃって制服」は、制服が義務付けられていない高校の生徒が好んで身に付ける制服風の私服であり、制服ファッションの流れから生まれたもので、日本で生まれた特別なファッションと考えられるという。

しかしながら、ここで着目すべきは、制服の着崩しがファッションの一部として見られるということである。ティヴィエトハーは、制服の逸脱を「個性を表現する」や「制服でもおしゃれを楽しむ」という言葉に置き換えて論を展開している。しかしながら、制服が「ファッション化」されてから10年ほど経過した今でもなお、制服を着崩すことに対し人々は批判的である。その理由は、それが本来の制服の意義に反するからである。きちんと制服を着用することで、身体的・精神的に組織の一員であるという自覚を与えることができるが、その形を変えるということは、その組織からの“逸脱”と考えられるからであろう。

人類学者ディック・ヘブディジによると、「サブカルチャーは監視と監視されることのあいだの空間に形成される」（成実 2009：255）。学生服は数ある制服の中でも社会的身分を顕著に表すものである。その制服を恣意的に着用することで監視される側「学生」は、「世間」に対して監視作用を呼び起こす。例えば、夜遊びをしている高校生を見た「世間」が、「学生なのにこんな時間に出歩いて危ないじゃないの」や、「親が心配しているんじゃないの」といったものである。近年の若者の夜遊びの広がりや、「成長した自分」を見てほしいという“寸足らずファッション”で自分を大人に見せることで、制服をまとった女子高生としては入り込めなかった夜の街中に、制服を「ファッション化」し、“自分が成長した大人”であることを世間にアピールすることで、夜の街中に入り込むことができたのである。また、サブカルチャーとは、自国文化と異文化とを掛け合わせて新たな変異体を生み出すことである（成実 2009：271）。現代の女子高生は制服とファッションを掛け合わせ、制服の「ファッション化」という変異体を生み出したのだ。

本稿では、ファッションの観点から学生服に焦点をあて、ある規則から逸脱したスタイルが出現した 1970 年代から 90 年代前半までの“ツッパリ”から振り返り、現代の女子高生“ギャル”との間の制服に対する意識の違い、および現代社会における女子高生の制服の「ファッション化」の存在意義について論じることにする。

第 1 章では、現代の女子高生ファッションの原点ともいえる、「昔の不良—ツッパリ—」と題し、振り返っていくことにする。ツッパリとは 1970 年代から 1990 年代前半まで流行した不良スタイルのことである。このツッパリは社会現象ともなり、ドラマや映画、キャラクターにまでその影響は及んだ。ここでは、ツッパリについて振り返り、彼らのファッションを分析し、さらに、そこにはイギリスのサブカルチャーとの関連があったということがわかった。日本のツッパリとイギリスのパンクファッションを絡めて論じていく。

第 2 章では、「制服の変容—現代の女子高生の実態—」と題して、いかにして女子高生ファッションが確立されたのかを論じていくことにする。現代女子高生の着こなし方は露出が多く、本来の制服の型を大きく逸脱している。彼女たちは、本来の制服の型を自分流に着崩すことで、制服を自分のファッションとして利用しているのではないだろうか。現代の女子高生は制服が導入された当初の女学生らとは違い、“仲間意識・協調性を高めるために装う”のではなく、“ファッションとしていかにかわいく見せるか”へと意識がかわってきている。この章では、彼女たちのスタイルを紐解いていき、さらに彼女たちの制服に対する意識を知るために街頭インタビューを行い、意識調査を実施した。すると、制服のス

スタイルを変えて着るのにはファッション性の他にも意味があるということが見えてきた。

第3章では、「社会的公共空間での女子高生としての意識—私はJKよ—」と題し、彼女たちは、自分が女子高生であることを世間にあえて露呈することで、女子高生であるから出来ること、あるいは行ける場所など時間的行動範囲を広げているのではないだろうかという考えに基づいて議論していく。ここでも女子高生を対象に街頭インタビューを行い、意識調査を実施した。社会的公共空間でのパフォーマーという定義をしている社会学者アーヴィン・ゴフマンの考えと絡めて議論を展開していくことにする。

第1章 昔の不良—ツッパリ—

まず、ツッパリとは何かを述べることにする。ツッパリとは、主に東京など関東地方での不良少年の総称で、既存の規範に突っ張って（意地を張って）従わない荒れた少年のことを表す。1970年代から1990年代前半の流行語にも選ばれた。この頃に社会的に流行したものとして、『スケバン刑事』、『横浜銀蠅』、『なめ猫』などが流行した。1990年代以降は、言葉としては「ヤンキー」や「やんちゃ」に取って代わられたためほぼ死語となり、現在ではほとんど使われていない。もはや、今ではツッパリという言葉は相撲取りを表す言葉として使われることの方が多くなった。

彼らの外見は、主にB系¹で、体型的には一般男子中高生なのにXXXLなどの大きめのサイズであるなど、ダボダボしたルーズな感じの服を好む。着こなしかたもルーズな感じで、腰パン、あるいは尻パンなどが非常に好まれる。これらによって身体が大きく見え、威圧感と存在感が増すという効果がある。髪の毛は染色、脱色している場合が多く、ドレッドパーマなどパーマをかける事が多い。中でも襟足の部分を伸ばす“マレット”という髪型が人気である。なお不良が親となった場合、その子供にもこの髪型をさせることがある。整髪料などを使い、髪型にはとても気を使う。長さは短髪から長髪まで人によって様々だが、パンチパーマやスキンヘッドという「本格派」もいる。「リーゼント」や「アイパー」は退潮傾向にある。ここにある「本格派」は主に田舎の方に多く存在する。眉の手入

¹ 本来「B」とは、「B-boying（ブレイクダンス）を指し、「Black（黒人）」や「Bad」という意味ではない。B系と言われる彼らは、サイズの大きめの服や大きめのネックレスなどブレイクダンスをするときのような格好を好むことから、そのような格好をする人々のことを「B系」と呼ぶようになった。

れも熱心であり、細く鋭く整えられる。アクセサリも多用され、色はゴールドやシルバーが多く基本的には目立つよう長く太く大きなものが好まれる。学生カバンの掛け方がだらしく女性の場合は、化粧が派手である。もちろん、ダボダボしたジャージやスウェットなどのファッションを好む場合があるが、一方でセクシーなファッションを好む場合もある。彼らが高校生になると、ジャストサイズ等の服装で、自信のボディーラインを強調する服を好むようになる。中学・高校生の場合、男子は長ラン・短ラン、ボンタンやドカンに代表される変形学生服を好んで着る。この他に幅が広くダブダブで、裾の広いラップズボンもある。通学カバンは、普通の学生カバンをわざわざペタンコにつぶしたり、カバンの両側を切り取ってしまうものもあり、その中にケンカをするときの武器にするために鉄板を入れる場合もある。カバンとしての意味を全く果たさないものを使用していたようだ。卒業式では刺繍（「卒業」や「友情不滅」など）の入った学生服で出席することが多い。この刺繍の入った学生服は、卒業式の為の一張羅として特別に発注して作っていたらしい。今の時代にこのようなことをしたら、卒業式に参加できなくなる。まず、そのようなことをする学生がいないだろうが。この刺繍を入れる文化の元は、暴走族の特攻服が始まりとされている。特攻服の背中には100%何か文字が書いてある。「龍」や「虎」といった強そうなイメージを持つ動物が書かれていることが大変多い。そしてよく街中で見かける光景だが、彼らは股を大きく開いてしゃがむいわゆる「うんこ座り」をしていることが多く、歩く際もガニ股である。電車やバス車内でも、大きく股を開いて座るため、スペースを要する。彼らの制服ファッションは、自分のサイズよりかなり大きめの物を好んで着用しているのでボディーラインがわからない。むしろ、隠そうとしているのかとも視える。

ツッパリたちのファッションが一躍脚光を浴び始めたのは、1980年代に入ってからである。その最も大きな契機は、横浜銀蠅の出現であり、1981年の「ツッパリ High School Rock'n Roll」のヒットであった。これは大変な社会現象にもなり、前者後者共にツッパリの気持ち・日常を忠実に表現していたため、当時のツッパリたちからの支持があつかった。

だが、そんなツッパリの時代も長くは続かなかった。1990年代前後に制服のリニューアルが始まった。その先駆となったのが、1981年の頌栄女子学院によるタータンチェックのスカートの採用であった。これまでの制服は、紺サージ²が多かったのだがこれを機に柄物

² もとは、絹毛交織を指したが、主に梳毛糸（そもうし）を用いて綾織とした服地をいう。近来、合成繊維も使われる。無地が多い。（広辞苑）

の制服が多く登場し始めたのである。そしてその後の 1988 年当時、タータンチェックのスカートで“スケバン”にしてもみっともないだけ、ということで自然と生徒達が自主的に短く着るようになり、スカートを引きずっていた「ツッパリ」は次第に衰退していった。ツッパリに悩まされていた学校側としてはよい結果になったのかもしれない。しかし、女子高生というものは限度を知らず、現代の女子高生たちはこれでもかというくらいにスカート丈を短くしているため、これもまた問題である。³

ツッパリが出現し始めた 1970 年代、ファッションの分野において変化が起こった。“パンクファッション”の出現である。パンクファッションの発祥はイギリス・ロンドンである。これに代表される有名ブランドが『ヴィヴィアン・ウエストウッド』である。ちょうどこの時代にツッパリ・暴走族が出現してきた。暴走族とイギリスのパンクは無関係ではない。

暴走族は、右翼的なシンボルや標語を彼らのスタイルの最も典型的な特徴としていた。彼らの特徴として、ハチマキや顔を隠すマスクをつけたが、そこにも日本の日章旗や菊文様が描かれていたこともある。こうしたシンボルは手書きされたり、刺繍されたり、貼り付けられたりしている。この他に所属しているグループの名前、愛国的なスローガン（“夜露死苦”や“友情不滅”など）も彼らの特徴として挙げられる。このようなシンボルやスローガンは右翼的なイメージと結びつくが、彼らがこのようなことをするのは単純に威嚇効果があったからである。彼らは右翼的なイデオロギーには無関心で、愛国的なシンボルも強そうに見せるための彼らなりのスタイルにすぎなかった。彼らはさまざまな逸脱集団（ヤクザ、バイクカルチャー、アメリカの大衆文化など）からアイテムを集めてはつなぎ合わせている。それらがつぎはぎされることで、混沌とした新たなものが出現したのである。一方、イギリスのパンクもさまざまなサブカルチャーやアンダーグラウンドな文化の記号を自分達のスタイルへと混ぜ合わせた。例えば安全ピン、チェーン、コンドーム、古い学校の制服、プラスチックのゴミ袋、ボンテージ服、ポルノグラフィックなイラストなどが主なところである。髪の毛は剃るか、奇抜な色に染めてツンツンに立て、威嚇効果を狙った。いくつかのスタイルにはディボーイズ、ロッカーズ、スキンヘッズのような過去のサブカルチャーに由来するものもあり、それらを混ぜ合わせてオリジナルのスタイルを作りだしたのである。ここで比較したいのは、暴走族がバイクカルチャーだったのに対して、パンクは音楽を中心に行っていたことである。両者の価値観は大きく違っている。さらにここで指摘したいのは、その大きな差異にも関わらず両者のスタイルは既成文化のシ

³ 『コスプレする社会—サブカルチャーの身体文化—』 p. 242

ンボルを流用することで、社会の価値観に揺さぶりをかけることであった。どちらもオイルショック後の不況・低成長時代を迎えた中流社会・学校文化に反発し、自分達をアウトローとして提示するためにスタイルのもつショック効果を意識的に使ったのであった。すなわち、彼らは自ら「社会の敵」を演じていたのであった。⁴

一方ツッパリが衰退し始め、街からスケバンが消え始めた 1990 年代のファッションは 80 年代の特徴であった、ポストモダンや派手な装飾よりシンプルなデザインへと変わっていく。また、ファッションビジネスもグローバル化の中で、その様子を変えて行った。主には企業戦略、マーケティングなどをメインにおいたデザインでライフスタイルをベースにしていた。企業の規模が大きくなるので、より有用性を重視したリアルクローズが多く占めるようになった。ここで大きく成長したのが、ルイヴィトン、プラダ、シャネル、グッチ、など。マスマーケットでは H&M、ZARA、ユニクロなど。スポーツウェアではナイキ、アディダス、プーマなどが成長した。90 年代はファッション産業のグローバル化が進んだ時代である。世界のファッション産業は 89 年のベルリンの壁崩壊以降「大移動期」に突入したといえる。⁵

第 2 章 制服の変容—現代の女子高生の実態—

2-a. 現代の女子高生の実態

近年の女子高生像というと、スカート丈を短くして足の露出をし、胸元を緩め、サイズの大きめなカーディガンなどを着用し、紺色のハイソックスを穿いているというのが一般的になっている。ツッパリファッションは、いわゆる“スケバン”でありスカート丈は長ければ長いほどよいとされ、スカートをより長く見せるため、上のセーラー服は短くしていた。足元は、靴の踵を潰してスリッパみたいにして履いていた。この時代の女子高生は特に装飾品などの細部までは特には気を配ってはいなかった。だが、現代の女子高生は違う。彼女らは、今となっては当たり前前にスカート丈が短く、足の露出率が高い。昔とは逆で、現代では短ければ短いほどカワイイとされている。セーラー服・ブレザー問わずカーディガンかセーターを着用している。ブレザー派の生徒は、ジャケットを羽織ることを嫌

⁴ 『コスプレする社会—サブカルチャーの身体文化—』 p. 270-271

⁵ ファッションプレス；90年代ファッション

う生徒が多く彼女達はブレザーを着用せず、学校から指定されているカーディガンかセーターを着用している。ブレザーが嫌われる理由として、活動的ではないということが挙げられる。仕事上スーツを着慣れている男性でも堅苦しいせいか背広の上着を脱いでしまう人がいる。それに最近の学校は冷暖房設備がしっかりしているので、通学時・帰宅時以外は寒い思いをすることも無くなった。学校帰りに立ち寄るお店もまた空調設備があるし、電車も満員だったら真冬でも汗をかくくらい暑くなる。これがセーター・カーディガンファッションが主流になった原因だ。だが、今の学校は学校指定のセーターを設定しているところが多く、学校指定以外のセーター・カーディガンを所持していた時点で没収されるらしい。足元は、紺または黒のハイソックスで夏はローファー、冬はムートンと合わせて履く。カバンは基本的には学生カバンだが、それに決まりは無く（私立学校は除くが）ショルダーバッグやリュックなど自分の好きなものを持ち歩いている。髪の毛の色は基本的には黒。だが、一部のギャルの子は明るい色に染色している。髪飾り（シュシュ）を手首に付けていたり、指輪をしていたり、飾りの付いたピンを胸ポケットに付けていたりする。化粧は濃く、これは私の持論だが大変威圧感を感じる。女子高生の制服の「ファッション化」が進んでいる為、制服をセンスアップすれば、生徒は自分の学校に愛着を示すようになり、外部からは「あの制服が着たい！」と憧れの目で見られ、入学志望者が増加する。志願者が多くなれば入学試験の倍率も上がり、その倍率を突破して入学した生徒の偏差値は自然と高くなっていく。⁶

このような「制服改定ブーム」は女子高生ブームを大いに活気付けた。その中でも「短いスカート」の効果は大きかった。「私は、まだ若い！」という事実を世間に公表するために、自分のスカート丈をどんどん短くし始めた。90年代のコギャル達からは、かつてのツッパリたちの「早く大人になりたい」志向は影を潜め、若いままでいたいと考える女子中高生たちは、みるみるスカート丈を短くしていき、それにルーズソックスを合わせるようになり、往年の「スケバンの不良」は影を潜めていった。1970年代から90年代までは、ボディーラインを見せずかつ、肌も露出しないスタイルが“大人”であった。したがって、彼らはダボツとした服を好んで着用していた。しかし、今は自分を若く見せたいという願望がある中、かつ成長した自分もアピールしたいという2つの願望が混在している。よって、現代の女子高生たちは、スカート丈を短くすることで下半身をあらわにしている。“成長した自分”をアピールするだけでは理に合わないので、上半身にサイズの大きめなカー

⁶ホワイト洋品店：現代制服考その1引用

ディガンやセーターを羽織ることで大人っぽさを演出している。このことで、“成長した自分”と“大人な自分”の混在が可能になったのである。

2-b. 街頭調査

今現代の女子高生の制服に対する意識を知るため、多くの人たちが行き交う地下鉄大通駅、改札口を出てすぐの『ヒロシ前』にて街頭調査を行った。

【調査方法】

高校生の帰宅時間（午後3時30～4時）を目掛け、8名の女子高生に街頭インタビューを行った。女子高生のタイプを3種類（ギャル系2名／ちょいギャル系3名／ノーマル系3名）に分類しそれぞれのタイプに当てはまる女子高生に声をかけ、自身の制服に対する意識などを問いかけた。私立・公立、学年不問でこの調査を行った。1グループの調査に要した時間は10分程度である。

【設問】

- I. 自分の制服の着方について意識したことはあるか
- II. なぜ、そのような着方をするか
- III. 周りも同じような感じか
- IV. 自分流のこだわりはあるか
- V. なぜ、校則に従わず着崩すのか（IVにて“YES”と回答した子に質問）
- VI. その着こなしは、かわいいと思ってしているのか（Vで“YES”と答えた子を対象に質問）
- VII. その着こなしは、女としての色気を意識しているのか
- VIII. どのような人が校則通りに着ているのか

【回答】

① ギャルの場合（2名）

AI. YES

A II. 楽だから／校則通りに着るとダサイ

A III. YES

NO : 周囲は自分より長い

A IV. YES : ブラウスの第一ボタンは閉めたら苦しいから閉めない。(場合によっては、第二ボタンまで開ける) / カーディガンの色を毎日変える / 学校指定のネクタイをリボンにする / スカートをカーディガンから少し出す / ブレザーの袖からカーディガンを少し出す / ブレザーのボタンは閉めない / アクセサリーをつける

A V. 自分流に着たいから / 周りと同じというのが嫌だから / 校則通りに着るとダサイから

A VI. YES

A VII. YES : 異性、周囲の目を意識している

NO : 特に意識はしていない

A VIII. 真面目な人 / 地味な人

② ちょいギャル系の場合 (2名)

A I. YES

A II. 楽だから / 周囲も同じ感じだから / 校則通りに着るとダサイ / 中学の時の規則が厳しすぎてその反動

A III. NO : 周囲の方がもっと短い / カーディガンではなく、パーカーを着る人もいる

A IV. YES : ブレザーのボタンは閉めない / ブラウスの第一ボタンは閉めない / 小物で表現 (マフラーは絶対に赤!! など)

A V. 周囲もそうだから / 校則通りに着るとダサイから / 周囲と全く同じというのがいやだから

A VI. YES

A VII. かわいさ、周囲の目を意識している

A VIII. 真面目な人 / 地味な人

③ ノーマル系の場合 (3名)

A I. YES

AⅡ. 楽だから／周りも同じ感じだから

AⅢ. 周りの人のスカート丈の方が短い／周りも同じ

AⅣ. YES：ブレザーのボタンは閉めない／NO：制服自体に変形できないよう細工が
されているので、変えようがない

AⅤ. 完璧に校則通りに着るとダサイから

AⅥ. NO：もっと派手にしたいが、校則があるので出来ない

AⅦ. NO

AⅧ. 真面目な人

以上のような調査に終わった。

2-c. 考察

まず彼女達は、周りと同じであることを嫌う。制服は型が決まっているので、そのままのオリジナルな状態で着こなしてしまうと皆一緒になる。それが本来の制服の役割だったのだが、今ではそれが倦厭されているので、女子高生は皆自由に制服を装いたがる。この傾向は、特にギャルの子に多く見られる。ギャルの子達は校則で定められたスタイルから大きく外れたスタイルを好む。スカート丈はこの上無く短くし、髪の毛は明るい色に染色し、ブラウスのボタンを普通の子より多めにはずしていたり、学校指定の物を着なかったりする(特に私立高校に多いのだが、学校指定のセーターがある学校が多いみたいだ。学校指定の場合はセーターが多く、脱ぎ着が面倒くさいということでカーディガンが好まれている)。Ⅱで“なぜ、そのような着方をするのか?”と尋ねたところ、「周りの友達かそうだから。」という回答が多く聞かれた。そしてⅥにて“今のその着こなし方はかわいいと思っているのか?”という問いに対して「YES」と回答した女子高生を対象にその情報源は何か尋ねたところ、「雑誌」や「友達やクラスメイトを見て、かわいいと思ったところを自分の制服にも取り入れている。」という回答が多く挙がった。周りと同じであることを嫌う彼女達が、周りの友達のマネをして自分のスタイルを作り上げている。彼女たちは、マネをするが、ただそのまま自分のスタイルに取り入れるのではなく、自分なりに一工夫を加えてから取り入れているのだ。つまり、彼女たちのスタイルは“周りとは全く一緒”ではなく、“周りとは似ている”風になるのである。したがって、必然的に周りの友達は似た子が多くなる。そこで似た者同士の仲間意識が生まれ、人間関係が円滑になるのである。

“学校”としての制服がある中でギャル系、ちょいギャル系、ノーマル系それぞれの系統の中で別々な“制服”が確立されているのだ。

また、自分流の着こなし方・こだわりについて質問したところ、「スカート丈は短くする」はほぼ全員でありその他「ブレザーのボタンは閉めない」、「ブラウスの第一ボタンは絶対にはずす」、「セーターではなくカーディガン」などの回答があった。その理由として、「スカート丈が長いと動きづらい」、「ブレザーのボタンを閉めると動きづらい（堅苦しい）」、「ブラウスの第一ボタンまで閉めると苦しい」、「セーターは脱ぎ着しづらいしポケットがないが、カーディガンは脱ぎ着がしやすいし、ポケットがあるので携帯電話やリップクリームを入れるのに便利」という回答を聴くことができた。これらのことから、“機能性”を求めて各自の機能に合ったスタイルを制服に取り入れているということが見えてきた。本来の型通りに着こなすと、動きづらいし苦しい。昔は学校に通学するためだけに制服を着用し放課後友達と遊ぶとなったら一旦帰宅し、普段着に着替えてから遊びに行っていたが、制服出現当初から時代が進んだ今、カラオケや映画、ショッピングなどの娯楽が増えた時代に生きる女子高生は、放課後に友達と遊ぶとなったら帰宅せずにそのままの格好で遊びに行くようになったのである。昔は、制服を着て学校以外のところへ外出するのに抵抗があったのに対し、現代では全く抵抗がないということがわかる。したがって、昔は通学時だけ制服を着用していたが、今では下手をしたら1日中制服を着用しているという日もあり得る。そうなっては動きづらい『本来の制服』は嫌われ、彼女たちは新たに機能性バツグンの制服スタイルを生み出したのである。以上のように、現代の女子高生に多く見られるスタイルが、ダボツとしたカーディガン、そこから少し覗くスカートが挙げられる。これらのスタイルは、機能性も去ることながらファッションとしても確立されている。

2-d. 寸足らずファッション

このような小さめの衣服を装うファッションは1986年頃から出現した。ジュリエット・アッシュとエリザベス・ウィルソン⁷によれば、それを“寸足らずファッション”と定義づけている。これは、小さい人のための衣服ではなく、さほど小さくない標準サイズの人がそれを着用することで、それ自体がデザインの要素となっている。寸足らずファッション

⁷ CHIC THRILLS - A Fashion Reader-

は、通常の衣服よりも丈が短く、きつそうなので周囲から見たら、その人が貧乏に見えなくもない。場合によっては、被災者に見えることだってありえる。寸足らず服は、通常サイズの衣服に比べて使用している布地の量が少ないので、周囲から「小さい服しか買うお金がない」と思われてもしょうがない。しかし、あえて寸足らずにしている衣服と通常サイズの衣服の間には値段の相違はない。むしろ、通常サイズより値段が高い寸足らずセーターもあるくらいだ。つまり、寸足らずファッションをしているからといって、その人が貧乏と言うわけではないということになる。またこのことから、“寸足らずファッション”がデザインとして成立していることもわかる。

寸足らずファッションは、読んで字のごとく、“寸が足りていない・ファッション”である。丈が短ければ、フィット感が通常の衣服に比べて強く、場合によってはキツイと感じることもある。そのため、着ている人の動きを制限していることが多い。寸足らずと動きやすさの間には二元的ないくつかの意味がある。①小さいが小さすぎない②フィットするがフィットしすぎない③短い短すぎない④タイトだがタイトすぎない⑤平凡な衣服と非凡な外見⑥身体を覆うが全てを覆うわけではない、という点が挙げられる。寸足らずファッションは、小さくタイトであることから、自分のボディーラインがあらわになる。衣服を小さくすることで、大人に成長した自分の身体を世間にさらけ出しているのだ。一般に、短くタイトな衣服を着てボディーラインをあらわにするスタイルをしていると、よく「セクシー」という言葉が出てくる。また、ボディーラインをあらわにするということは、“裸”で外をうろついていると言ってしまうても過言ではない。ボディーラインが美しく、人に見せつけてやりたいと思うのは若い年齢(16歳~35歳)のときである。自分の美しく、崩れていないボディーラインを見せることによって、世間に“若さ”をアピールしているのだ。このことから、自分の身体の一部をさらけ出し、ボディーラインをあらわにする“寸足らずファッション”は、色気(女性らしさ)を引き出し、“若さ”“成長した自分”アピールになっているということが言える。

2-e. まとめ

一昔前のツッパリは、今の女子高生のように「周囲がやっているから私も同じような格好をする」のではなく、不良になりたいと考えるごく一部の集団の間で流行したファッションであることがわかる。また、「ツッパリ=不良」と定義できるが、今の女子高生においては、「スカートが短い=不良」と定義づけることはできないということもわかる。なぜな

ら、本調査にてスカート丈が短い真面目な子やただの個性派の子もいたからである。ツッパリは制服を変形することで、“自分は不良だ”ということを社会的公共空間にアピールし、自ら「社会の敵」を演じていたのである。それに対しギャルは、制服を変形することで社会に何かをアピールするというよりは、周囲の人または、ファッションを意識し、“自分がかわいく見られたい”と考え、ギャルスタイルをしているのだ。

このように女子高生は周囲を意識し、自分のスタイルに合った、自分流の制服の着こなし方をしているということがわかった。だが、彼女たちは、世間の“女子高生”イメージを利用して自らそれを演じているのではないか。それを演じることによって、社会的公共空間にての領域を広げているのではないか。次の第3章では、アメリカの社会学者アーヴィン・ゴフマン（1922～82）の考え方に則って、社会的公共空間における彼女たちの意識について述べていく。

第3章 社会的公共空間における女子高生としての意識

—私はJKよ—

われわれは何をするにもたいていだからと居合わせている—〈共在〉している—が、周りとのやりとりをスムーズに、なんの問題もなく遂行していくためには、日常慣行の助けが不可欠である。たとえば、雑踏をすり抜けていく、それだけの間に、あたりの人たちの動きをチェックし、間合いをはかりながら、自分の動作の落ち着き先を1つ1つ決めていく。変わったことがないかどうか見極めながら、また、自分の外見もそうあるように願いながら（安川 1991：ii）。このような考え方を定義づけたのが、カナダ生まれのアメリカの社会学者—アーヴィン・ゴフマン（1922～82年）である。本章では、第2章に引き続き女子高生を対象にフィールドワーク調査を実施した。その考察とゴフマンの定義を関連付けて論じていく。

3-a. 街頭調査

女子高生が社会的公共空間でのイメージを利用して、彼女達は“女子高生”というものを世間にアピールし、定義づけそのイメージを逆手に取り行動範囲を広げているのではないのだろうか。このことを立証するために、大通・狸小路3～4丁目にて調査を実施した。

【調査方法】

高校生の帰宅時間から少し間が開いた午後7時頃、女子高生7名に学校（私立・公立）、学年不問で無差別に「女子高生としての意識」を街頭インタビューにて調査を実施した。

1グループの調査に要した時間は10分程度である。設問・回答は以下の通りである。

【設問】

- i. 学校でも今と同じ格好をしているのか
- ii. 1日の中で今の格好に切り替えるのはいつか（iにて“NO”と回答した女子高生を対象に質問）
- iii. 今の格好にするのはなぜか（iiの回答者を対象に質問）
- iv. なぜ、学校から出てから今の格好をするのか
- v. かわいい制服の着方とは何か

【回答】

A i. YES : 3名 / NO : 4名

A ii. 放課後（学校が終わってからすぐに） / 学校を出てから / 帰宅時（いつもは私服で行動している）

A iii. ダサい、邪魔、かわいくない / 学校では先生に注意されるし、校則があるので変えられない / 制服ではいけないところがあるから

A iv. みんなやっているから / かわいいから / JKブランド / スタイルがよく見えるから

A v. スカート丈を短くする / カーディガンの色にこだわる / 冬場はブランド物のマフラーをする / リボンを緩める / 化粧をきちんとする / 髪の毛をセットする / ピアスやリングなどのアクセサリを身につける / カラーコンタクトをする / 着崩しすぎず、ある程度ちゃんと着る / スカーフからリボンにする

以上のような回答を得ることができた。

3-b. 考察

i の設問にて、本調査に協力してくれた女子高生の約半分が、学校内と街を歩く際の制服スタイルを使い分けている。また、iiにて「1日の中で今の格好に切り替えるのはいつか」という問いに対し、「放課後」、「学校を出てからすぐ」という回答を得た。このことから、学校では校則があるためその通りのスタイルをせざるを得なくなる。さらに、周りもみなそのスタイルをしているため、必然的に自分もしなければいけなくなるということだ。また、iii～vの設問にて、彼女たちの“見た目”についての質問を投げかけた。「なぜ、制服スタイルを変えるのか」の質問に対し、「学校では短くできない」、「(校則通りのスタイルは)邪魔だし、かわいくないし、ダサイ」などの回答が多数であった。「(街中を出歩く際に)なぜ、今の格好にするのか」の質問に対しては、「スタイルがよく見える」、「周囲もやっているから」、「かわいく見えるから」、「JKブランド」というような、自身の見た目をよく見せられるからという回答が多数挙がった。さらに、「かわいい制服スタイルとは」の質問に対しては、彼女たちの第一声が「スカートを短くする」であった。その他の回答は、「カーディガンの色にこだわる」、「リボンをゆるくする」、「化粧、アクセサリーをする」、「冬場はブランドマフラーをする」などの回答が多数であった。この調査を行ったのが午後7頃だったということもあり、このような格好をしている子がほとんどであった。

このことから、彼女たちは彼女たちのイメージの“女子高生”を意図的に装い、演じているのである。自らの制服スタイルを“かわいい女子高生=ギャル”により近づけることによって、放課後の夜遊びをも可能にしたのだ。彼女たちの話を聞く限り、ある程度規定通りに装う子は真面目な子であると全員口を合わせて述べている。真面目な子は放課後に街中へは行かず、学校の講習を受けるまたは、塾へ行くためそのまま家に帰る。よって、周囲を意識することがないので、制服をオシャレに着こなす必要もなくなってくる。一方で、放課後遊びに行きたいと考えている女子高生はギャルになりたいと思っている。しかし、ダサイ規定通りの制服のままだとかわいくないので、人前に出たくなくなる。そこで、彼女たちは制服を自分たちの理想に近い形に変形するという手に出たのだ。制服を「女子高生(ギャル)」にアレンジすることで、夜遊びを可能にした。真面目な子が夜遊びをしていたら、世間から不思議な目で見られることがしばしばであるが、ギャルにおいては、世間が夜に彼女たちを見慣れているため、さほど気にはならない。ここで、世間が考える女子高生“ギャル”と女子高生が考える女子高生“ギャル”のイメージが一致するのだ。社会的公共空間にての女子高生のイメージは女子高生によって作られたものなのである。

3-c. ドラマトゥルギイ的パースペクティヴ（観点）

ここからはゴフマンの定義に絡めて論じていく。彼は、「物理的な場所に依じて人々の行為・活動は編成される」と定義した。つまり、人々は家、街頭、車内、公園、学校、職場、店内、劇場などで異なる振る舞いをするということなのだ。この範囲内で組織・編成される集団を社会組織⁸と呼ぶ。ある状況内には「社会的集まり」と呼ばれる一定時間にお互いに居合わせている2人以上の人々の身体的集合が見られる。これを社会的行為⁹と呼ぶ。このような行為は、日常当たり前のように繰り返されているので、無意識に生活している。人々は、このような状況に意識的に入っていく。しかし、その状況の中で居合わせている人々の身体間で相互に行われている行為は、個人の「意識」のレベルではなく、人々の身体間で生起している出来事であるがゆえに、<間身体>レベルの行為となる。つまり、人は他者を直接に観察できるのであり、また直接に他者に観察されるのである。

ここで登場するのが、彼のドラマトゥルギイ的パースペクティヴ（観点）である。これは<間身体的行為>を「印象管理¹⁰」特徴とするパフォーマンス（他者の面前で遂行する身体表現行為）と言う観点から研究するということだ。この参加者たちは、他者に対する自己の印象を管理・統制しながら他者の前に身体行為を呈示している。ここで、ゴフマンが着目したのが、英米社会では、どのように自己呈示というパフォーマンス¹¹が調節されているのかという観点から<間身体行為>の秩序構造が観察できる、という点であった。ここで、ある特定の参加者のパフォーマンスを基本的な準拠点とすると、「パフォーマンスを遂行する参加者＝“パフォーマー”」、「他者のパフォーマンスに寄与する人々＝“オーディエンス”」とする。これを今の女子高生を取り巻く環境に当てはめると、「パフォーマー＝女子高生」、「オーディエンス＝周囲の人間」ということになる。パフォーマンスはパフォーマーによって他者たちの面前で実演される。よって、そこに居合わせた他者はオーディエンスになる。ここでいうパフォーマンスとは、“女子高生であること”であり、女子高生によって、「女子高生」が演じられているのである。個人が他者たちの直接的面前（学校以外の場所）に登場するとき、その個人は身体的存在であるという事実によって自己に関

⁸ ここでの社会組織とは、直接的に身体的に面前に居合わせるときに、諸個人がお互いの行為に影響を及ぼす関係のことをいう。

⁹ これは、他の人に対する知覚が発生した瞬間から、周囲に人がいなくなって自分独りになるまでの間に生じている身体行為のことをいう。

¹⁰ ここでいう印象管理とは、状況内でどのように他者に対して自己表現・自己呈示（他者を前にした身体行為の遂行）を行うのかということである。

¹¹ 彼のいうパフォーマンスとは、単なる演劇の演技のことだけではなく、ある一定の状況にいる参加者が他の参加者＝観察者にどんな風であれ影響を与えるのに役立つような活動のすべてであるということだ。

するなんらかの情報—私は「JK（女子高生）」よ—を表出している。これは、ある状況内で共在にある個人の身体自体は、コミュニケーションの媒体として機能を果たしているということである。＜間身体的行為＞においては、言葉によらずして身体が存在自体によって、ある種のコミュニケーションが成立しているし、身体行為自体が一定の意味を表現している。

ゴフマンによれば、「人間身体は1つの記号体である（安川 1991:41）」。

こうした記号としての身体行為の多くは、社会的に制度化されていて、公共的な意味付与がなされている。彼はこのような公共的な身体記号のことを「身体イディオム」と呼んだ。この成立が、諸個人の集合体を「社会」と呼ぶ理由の1つと考えていた。面前に居合わせた他者たちの方は、その個人についてのなんらかの情報を活用しようとしている（あの人はどのような人で職業は何なのか、など）。その他者たちは、身体イディオムを通して伝達された情報によってその個人のなんらかの「印象¹²」を受けることになる。こうした印象にしたがって、その個人の社会的アイデンティティや社会的カテゴリー（あの子は高校生なのか。その中でもギャルなのかOR そうではないのか）の判定によって、そこに居合わせた他者たちはその個人をどのように扱うかを決めている。身体イディオムによって獲得された自己情報としての印象が、まずは他者が状況の定義をするための主要な情報源である。他者たちは、知人ではない者との相互行為というたいていの場合には、情報源の代用品である印象を使用する傾向がある。このような印象に基づいて状況が定義されるという「虚構」が社会構成の実態である。したがって、共在において、状況の定義を維持させる装置としては外見のような印象しかない。つまり、個人の内面・主観・意図そのものに注意しても無駄ということだ。個人が他者に与えた印象が真か偽か、本物か偽物か、真実か虚偽か、リアリティか見せかけかを決定することは、オーディエンスの戦略において重要である。したがって、世間はその個人の外見によってその人の扱い方を変え、外見だけによって人の中身・身分などを判断しているということである。現代の女子高生は、「女子高生」に見られたいから寸足らずの制服の「ファッション化」を行い、「女子高生」であることを世間に認めさせ、女子高生のままでは立ち入れなかった社会的公共空間に入り込むことを成功させたのである。

¹² 個人が身体表現によって伝達している自己情報に基づいて、居合わせた他者たちがその個人に関して抱く情報である。

—おわりに—

本稿では、ファッションの観点から学生服に焦点をあて、ある規則から逸脱したスタイルが出現した 1970 年代から 90 年代前半までの“ツッパリ”から振り返り、現代の女子高生“ギャル”との間の制服に対する意識の違い、および現代社会における女子高生の制服の「ファッション化」の存在意義について論じてきた。第 1 章では、昔と今の女子高生の制服に対する意識の違いを比較するため、ツッパリについて取り上げ、第 2 章では、現代の女子高生の制服に対する意識を街頭インタビューにて調査し、ツッパリとあわせて考察した。第 3 章でも女子高生を対象に街頭インタビューを実施し、社会学者ゴフマンのドラマトゥルギイ的パースペクティブとあわせて考察した。その結果、昔のツッパリは、不良になりたいと考えるごく一部の集団の間で流行したファッションであり、現代の女子高生みたいな大衆文化ではないということがわかった。周囲がやるからではなく、自主的に行うものであったのだ。したがって、ツッパリはその時代の不良の象徴であったといえる。一方、現代の女子高生による制服からの逸脱行為は、周囲の人に「自分をいかにかわいく見せるか」がポイントであったようだ。自ら「女子高生（ギャル）」を演じ、自分が「女子高生」であると言う事実を社会的公共空間にアピールすると同時に、寸足らずファッションを制服に用いることで、「成長した大人な自分」をもアピールしていたのである。そうしないと、世間から「あの子は女子高生」という目で見られるため、規定通りの制服を着用した女子高生のままでは入り込めなかった社会的公共空間への侵入を可能にしたのである。彼女たちが思い描く「女子高生」と、制服を着た女子高生との間に生まれる差異を認識したのである。また、社会的公共空間にある「女子高生」のイメージも制服を着た女子高生ではなく、「女子高生」を装った「女子高生」だったのである。その為、寸足らずファッションによってボディーラインがあらわになった大人な「女子高生」を生み出したのである。彼女たちはただ制服を変形していたわけではなく、そこには社会的公共空間における「女子高生」としての意義があったのである。

近年、女子高生の制服からの逸脱が多く見られるようになってきた。それとともに、夜の街中を歩く女子高生も多く見受けられるようになった。本来の意義から逸脱したスタイルを取るのには、「成長し、大人になった自分」を世間にあえてさらけ出すことで、高校生の夜遊びという社会的に逸脱した行為を可能にしたのである。女子高生の夜遊びは街中で

見慣れつつあるが、その一方で、女子高生にまつわる性犯罪が増えているのも事実である。制服の「ファッション化」は完全な「制服ファッション」になることはできず、いつまでもそれは「逸脱行為」とみなされるのであろう。

－参考・引用文献／URL－

- 成実弘至編 (2009)『コスプレする社会－サブカルチャーの身体文化－』 せりか書房
- 安川一編 (1991)『ゴフマン世界の再構成－共在の技法と秩序－』 世界思想社
- Juliet Ash and Elizabeth Wilson (2004)『CHIC THRILLS - A Fashion Reader -』
- 山田富秋・好井裕明編 (1998)『エスノメソドロジーの想像力』 せりか書房
- ハロルド・ガーフィンケル他著、山田富秋＋好井裕明＋山崎敬一翻訳 (2004)『エスノメソドロジー－社会学的思想の解体－』 せりか書房
- ディック・ヘブディジ著、山口淑子訳 (1986)『サブカルチャー－スタイルが意味するもの－』 未来社
- ピエール・ギロー著、佐藤信夫訳 (1972)『記号学－意味作用とコミュニケーション－』 白水社
- アン・ホランダ著、中野香織訳 (1997)『性とスーツ－現代衣服が形作られるまで－』 白水社
- ポール・コブリー著、吉田成行訳 (2000)『記号論－ FOR BEGINNERS－』 現代書館
- 赤阪俊一、乳原孝、辻幸恵著 (2004)『流行と社会－過去から未来へ－』 白桃書房
- 中野収著 (1985)『若者文化の記号論－感性時代のヒーローウォッチング』 PHP 研究所
- 新村出編 (2008)『広辞苑 第六版 あーそ』 岩波書店
- ファッションプレス (2010年12月13日現在)
http://history.fashion-press.net/punk_1.htm
- ホワイト洋品店;現代制服考 (2010年12月13日現在)
<http://www.ni.bekkoame.ne.jp/white-yt>
- チャン・ティヴィエトハー 『女子学生の学校制服・ファッション意識に対する日越比較』 (2010年12月13日現在)
<http://machicom.nt.swu.ac.jp/files/dir4cae794f2aa59/21sr002.pdf>